

Institute for Language Education
Aichi University, Nagoya
Goken News

No. 13 July 2005



イギリス人の「心のふるさと」といわれるコッツウォルズ地方にあるパイブリーの村：
オックスフォードから西に行くと、イギリス人の「心のふるさと」といわれるコッツ
ウォルズ地方がある。その中でもパイブリーは古い家並を残すすてきな村である。

CONTENTS

- ・「未知」への旅
 (山田 晶子) 2
- ・イギリスで1年間暮らして思ったこと
 (多田 哲也) 3
- ・韓流ブームのロケ地を訪ねて
 (藤森 猛) 6
- ・日韓関係の基礎知識 竹島問題って何だろう
 (常石 希望) 8
- ・メキシコの定番デザート、チュロスとチョコ
 コラテ
 (丸谷雄一郎) 12
- ・最も長い英単語
 (安藤 聡) 14
- 海外最新事情 17
 ・イギリス

- ・ドイツ
- ・フランス
- ・韓国

- 外国語コンテスト 21
 - ・英語部門
 - ・ドイツ語部門
 - ・フランス語部門
 - ・中国語部門 (法・営部門)
 - ・中国語部門 (現中部門)
 - ・韓国・朝鮮語部門
 - ・日本語部門
- 外国語コンテスト入賞作 24
 - ・英語部門
 - ・日本語部門

「未知」への旅

経営学部
山田 晶子

【 】

最初に連想ゲームをしてみよう。出発は「大学生」という言葉である。まず1つの型として(A)大学生=青春=若さ=冒険=感動というものが存在する。次にこれに対する裏の(?)型として(B)大学生=迷い=悩み=孤独=ひきこもりというものがある。そして3つ目の型として、(C)両者の中間というものが存在する。

さて、あなたはどの型に入るのだろうか。多くの学生は中間の(C)型に入るのではないだろうか。「青春は楽しい」という世間の俗説に反して、筆者は、今、自分の青春時代を振り返りまた友だちの話聞き、青春に関する多くの本を読んできて、「青春は楽しい時もあるけれども悩みと精神的苦痛の時期である」ということが真実を衝いている言葉であると思う。そして筆者の年代の者は、ほとんど皆が、それぞれに悩みを解決するべく一生懸命努力してきたと思うのである。

悩みは多種多様である。またその解決策はいろいろとあると思うが、一番大きな悩みは「自分とは何か?」という哲学的命題であり、これは一生つきまとう悩みであろう。

今、若さに恵まれているが、(A)と(B)の中間的な存在である大多数の学生に、筆者は、それが大きなものであれ小さなものであれ、悩みを解決する方策として、また青春時代をより充実したものにするために、「未知」への旅が有効であるこ

とを述べようと思う。

【 】

Birds of a feather flock together. (類は友を呼ぶ。)これは有名なことわざであり、誰もがこのことわざは真実を告げていると思うであろう。筆者も、ある程度、このことわざが真実であることを認める。しかし、「本当の自分」を知るのは難しいことである。特に若い人はまだまだこれからその「人間」が形成されていくのであり、「本当の自分」については分かっていないと思う。ゆえにあまり早くから、「自分はこの友人としかつき合わない」「あの人は別世界の人だ」と決めつけることは、自分の成長を自分で制限してしまうことになるであろう。若いときにはできるだけ多くの人と接して欲しいと思う。そして知らない人が自分に近づいてきたら、必要以上に警戒したり逃げ腰にならないで欲しい。積極的に知らない世界、知らない分野の人と知り合いになろう。「類は友を呼ぶ」ということわざの真実は、人が老いてからこそ当てはまることわざであると言えよう。

勉強やクラブ活動で忙しいから付き合える人も時間も限られてくるとは思う。しかし、本の世界には大勢の未知の人間が住んでいる。一人になった時には読書によって世界を広げることもできるのだ。そしてグループでも良いし、また一人でも良いのだが、旅に出よう。知らない土地では多くの新しい経験ができるし、新たな友人もできるであろう。今までつき合っていた友人と一緒に旅をすることによって、その友人の新たな側面を見出すこともあり得る。

【 】

その旅は、国内旅行も良いであろうが、できれば一度は外国旅行することを薦めたい(諸事情で外国へ行けない人は、外国について書かれた本や映画を見てほしい)。これの意味は、自己を一層客観的に見つめること、日本を外部から見つめる

ことに存する。また自分のアイデンティティを確立するのに役立つであろう。また日本の長所と短所を理解するのに役立つ、一層日本への愛が深まるであろう。

愛知大学は、イギリス、アメリカ、中国、ドイツ、フランス、韓国、オーストラリアと海外短期語学セミナーの取り決めをしているので、夏休み或いは春休みに、大学からの手配で安全に外国へ出かけて勉強をして単位を取ることができる。これは大変有り難い制度である。確かに費用がかかるが、このためにアルバイトをすることは大いに薦められることである。

筆者も何度か外国へ旅行して来た。一人の時もあれば団体の時もあった。若いときは体力があるので、少々無茶をしても心身には余裕がある。冒険をしてみる事が大切である。筆者が、イギリスの湖水地方へ一人旅をしたのは約25年前であった。初めて接するどの人もたいていは親切であった。修士論文はワーズワスについて書いたので、彼の詩に詠われていて有名な水仙を見たくて、アルズウオーター湖方面まで一人で行ったのだが、どの辺りに水仙があるのかは分からなかった（誰にもその場所は分からないらしい）。一人で何キロも歩き回って夕方になり、暗くなったので心細くなりながらもバス停まで約2時間、農地の間の細い道を歩いたものだった。辺りには誰一人としていなかった。全くのひとりぼっちであった。しかしバス停まで到着してみるとすでに最終バスは出てしまっており、ヤムなく近くのウィンダミア湖畔のホテルに泊まったのだった。このような思い出は今では貴重なものになっている。遅しさを身につけることができたのだから。

初めてイギリスへ行ったのはそれよりも約十年前のことであった。これは団体旅行で出かけたのだが、イギリスへ到着したときの感激は忘れられない。まだ海外旅行が珍しいときであったから。初めてイギリスへ行って帰国したとき、是非またイギリスへ行きたい、と思った。そしてこの思いは実現したのであった。

『『未知』への旅』ということで人間や場所と

の新たな出会いについて少しばかり述べて来た。海外旅行について述べたが、遠い所へ出掛けなくても日本の身近かなところでも新たな出会いはいくらでもある。行きたくても諸事情によって外国へ行けない人もいるであろう。しかしがっかりする必要はない。つまりは、勇気を出して今まで知らなかった人々と、また読んだことがなかった本と、出かけたことがなかった所と接することが大切なのである。

イギリスで1年間暮らして 思ったこと

法学部
多田 哲也

昨年度2004年4月から2005年3月まで、海外研修でイギリスのオックスフォード大学で研究する機会を与えられた。実際にイギリスという国に一年間住むことで、色々気づいたこと、考えさせられたことを、この場を借りて記してみたいと思う。

まず最近のイギリス人の子供に対するしつけや態度について思ったこと。私の今回のイギリス滞在の場合、8歳から1歳までの小さい子供たちをともなっていたせいで、小学校その他の場所で、同じぐらいの年齢のイギリス人の親子と接する機会が多かった。それで彼らの子育てぶりについて観察する機会も多かったわけだが、正直な感想として、最近のイギリス人の若い親たちは、しつけなどについてかなり甘くなってきているんじゃないかな、と感じることが多く、私個人としては、

かなり意外な感じがした。というのも、今回の渡英前から、イギリスの文化、生活などについての本はかなりあれこれと読んだが、大抵の日本人によって書かれた本では、「イギリス人は犬には優しいが子供には厳しい」とか「日本人の親たちのように、子供が騒いで他人に迷惑をかけても放っておくような親はイギリス人にはいない」といったことが異口同音にいわれており、とにかくイギリス人は日本人などに比べれば、子供のしつけには厳しいんだ、と思いつ込んでいたからである。そのこともあって、うちでは渡英前に、子供たちには「イギリスに行ったらお行儀よくしていないといけないよ。日本みたいにまわりの大人は子供に甘くないからね。」ということをおおざっぱに言いつけていたのだが、実際には日本と同様、子供が騒いでまわりに迷惑をかけても放っておいている親たちを見る機会も多く、それほど日本と違うという印象はなかった。またおもちゃやゲームなどについても、日本と同様にかなり高価なものでも、子供からいわれるままに買い与えている甘い親が多いような印象を受けた。そしてこういった最近の傾向は、イギリス人たち自身もよく自覚しているらしく、年配の人たちなどはかなり批判的である。何人かの「おばあちゃん」と呼んでもいいような世代の女性たちの口からは、こういう最近のイギリスの傾向に対して、「嘆かわしい」と言う声を聞いた。他の国については詳しくは分からないので断言は出来ないが、やはり少子化その他の要因によって、現代社会では子供のしつけは甘くなるというのは、いわゆる先進国に共通した流れなのかもしれない。

またこういうこともあった。イギリスには独特の「パブ」といわれる飲み屋があるということは、日本でもよく知られるようになってきている。このパブについても、大抵の日本人による観光ガイドブックなどでは、子供は立ち入り禁止だと書いてあるのだが、私の家族が行ったことのあるいくつかのパブでは、どこでも子連れOKであった。これがロンドンのオフィス街のパブなどであれば、違ったかもしれないが、少なくとも私たち家族が

住んでいたオックスフォードやいくつかの田舎町のパブなどでは、子連れでもなんの差し支えもないようであった。もしかしたら時間帯のことなどが関係していたのかもしれないが（例えば夜だったらだめだったが、昼間だったので大丈夫だった、とか）、これも「子供に厳しいイギリス」という私が持っていた先入観からすれば、非常に意外な感じがした。他にも同じようなことを感じるものがいくつかあり、とにかく私の印象では、社会全体も子供という存在に対して、甘いというか、とにかく寛容になっている感じがした。

それについて思い出したのが、吉田健一（1912 - 77、吉田茂の息子であり、滞英経験の長い英国通として知られる評論家）のエッセイで次のように言われていることである。

英国というのは不思議な国で、何かのことでどこまで無関心でいられるだろうと思っていると、或る時期になって俄かに態度を改めてそれを実行に移す。たとえば十六世紀あたりから・・・英国での動物虐待には目を蔽わせるものがあって、そうして動物を虐待するのが大衆が愛好する公認の見世物の一つにさえなっていた。それが十九世紀になって動物は保護すべきものという方向に英国人の考え方が変わり、これが急速に立法その他の措置が取られる結果になって、今では英国のように動物が完全な形で保護されている国はまずないと言える。かつては奴隷貿易が大きな収入になっていた英国が、奴隷制度の廃止を決定したのみならず、その海軍力を行使して世界的にこの貿易を絶滅したのも別な例である。（吉田健一「英国昨今」、『英国に就いて』筑摩書房、1974年）

だからもしかしたら、動物や奴隷のように、今までとにかく厳しく扱って冷遇していた「子供」という存在に対して、イギリス人は現在急速に態度を改め、保護すべきものとして扱いつつあるのかもしれない、と思ったりもした。

他にもついでにもう少し子供に関係のある話を

続けさせてもらおうと、これは割合よく知られるようになってきていることだが、「ポケモン」を代表とする日本発の子供文化の、イギリスにおける浸透ぶりにも驚かされた。他にも「ベイブレード」、「何タレンジャー・シリーズ」や「たまごっち」などが、イギリスの子供たちの間で人気があった。特に「たまごっち」は、ちょうど帰国する直前のころ、うちの子供が行っていた小学校でも大人気で、かなりの数のクラスメートが学校に持ってきて、ひまさえあればそれで遊んでいるようだった。また他にも日本発ということ言えば、公文式の教室（そのままKUMONと呼ばれている）もうちの家と同じ通りにある教会のホールを借りてやっていたり、バスの車体に大きな広告を載せていたりして、かなり手広くやっているようだった。イギリス人たちからすれば、日本という国は、娯楽でも教育でもとにかく子供に対して手間ひまをかける親の多い国として知られているようで（実際イギリスで出版されている世界の地理についての本などでは、日本人は非常に教育熱心な人たちである、と言われていた）、そういった国の文化が、今現在のイギリスでも進行中の、少子化にともなう「一点豪華主義」の子育ての方向に合致しているのだらうと思ったりした。

* * *

話は変わるが、オックスフォード大学の中で私が所属していたチャンピオン・ホールは、非常に国際的なコレッジで、色々な国からの留学生が来ていた。その中でポーランド人の研究者から聞いた話が興味深かった。彼は留学期間を終えた後は、母国のポーランドに帰って大学で教えることになるが、受け持ついくつかの講義のうち、半分は英語で、半分はポーランド語でやることになるだろうというのである。なぜ半分も英語でやるかということ、そのほうが学生に人気があるからだそうだ。つまり講義も英語でやってもらうことで、できるだけ英語に接して自分の英語の能力を高めたいという気が、学生たちの間で非

常に強いということらしい。彼に言わせれば、ポーランドだけではなく、他の東欧の国々やスウェーデンなど北欧の国々でも、講義をしたり論文を書いたりすることについてはできるだけ英語で、という具合に、共通言語としての英語への一極集中化が、ヨーロッパではこれまで以上に急速に進んでいるという。またインドなどは、イギリスの旧植民地としての歴史的背景などもあり、今までも常に英語教育が盛んであったわけだが、チャンピオン・ホールにいたインドからの留学生の話では、ここでも最近では、これまで以上に英語の重要性が強調されていて、英語の学習をスタートする年齢を今よりさらに引き下げて、より高度な英語能力を持った人材の育成を政府が考えている、とのことだった。こういった話を世界のあちこちからの留学生から聞くにつけても、それがいいことか悪いことかは別としても、とにかく世界的にコミュニケーションの手段が、英語へとますます収斂されていっていることを肌で感じさせられた。

こうした世界の流れに対し、日本でも小学校からの英語教育に向けた動きなどもあるが、実際には日本では、こういった「使える英語を身につけるために、出来るだけ早い時期に英語教育を！」という要望は、子供の親たちからのものが主で、いわゆる「知識人」たちからは、「いや、それよりも母語としての日本語教育の充実を」といった言い方による批判的な意見を聞くことが多いようである。（私の考えでは、別に英語教育と日本語教育を、二者択一のものとして対立させる必要は無いように思うのだが。）これまでは確かに、そういった知識人たちの言うように「日本はそういった英語を使わざるを得ない国々とは事情が違うから、日本人の場合は、実用的な英語はできないままでもいいんだ」ということが、ある程度妥当な意見として通用してきたわけだが、今後の世界情勢においても、日本はこの考えでずっとやっていけるものかどうか、非常に興味深いところである。

韓流ブームのロケ地を訪ねて

現代中国学部
藤森 猛

「日韓友情年2005」を迎えた今年の3月末、韓流(한류)ブームの火付け役となった全20話のテレビドラマ『冬のソナタ』(겨울연가)の撮影ロケ地を再び訪問した。『冬ソナ』は、言葉の美しさ、心の美しさ、自然の美しさ、メロディの美しさなど、素朴で純粋な描写が随所に溢れ、日本や中国のファンの気持を惹きつけている。また特に感動を呼び起こしたシーンは、出会いと別れ、再会の場面であり、木立や湖、学校や路地、スキー場やカフェの中での撮影がドラマの効果を高めている。

今回の目的地は、『冬のソナタ』第19話の撮影ロケ地となったソウル市の「市民の森」(시민의 숲)である。

「オノポリサン」になって

『冬ソナ』の撮影ロケ地を訪ねるには、日本の団体ツアーで申し込みができるが、個人ツアーで行く時でも韓国現地のホテルでオプションツアーを申し込める。春川(춘천)、南怡島(남이섬)などの撮影スポットと食事や土産店めぐりがセットになって、料金は1日で60000~80000ウォン程度(約7000~9000円)となっている。例えば日本語のチラシには「ペ・ヨンジュンさんのなじみの店、会えますね」とあり、チラシをよく見ると「会えますね」の後ろに「きっと」と書いてある。

ロケ地を訪ねるには、まず「御のぼりさん」ツアーに徹することが一番であると思い、旅行会社

の人からいただいた「ソウル市内免税品店共通使用券」に記載された6つの大型免税品店の一つ(新羅免税店)へ行くことにした。

訪問当日、ソウル市中心にある南山タワー(남산타워)横の新羅ホテルや周辺の道路には、国賓の方が来場した関係で、アイルランドと韓国の国旗が至る所に飾られていた。ホテル敷地内の免税品店に入ると、そこは外部と別世界であり、店内は日本語と中国語が飛び交っていた。また免税品店の屋上には、『冬ソナ』の特設コーナーが設置され、ドラマの主人公のチュンサン(ペ・ヨンジュンの役柄)とユジン(チェ・ジウの役柄)がつくった雪だるまが飾っており、二人の写った特大パネルの前では、日本の観光客の方が代わる代わるシャッターを切っていた。冬ソナファンとしては、たとえ作り物の雪だるまやベンチであったとしても、一つの経験を共有できたような気持となり、嬉しくなるので不思議である。



ソウル「市民の森」入口。公園の案内板の両側にロケが行われた緑のフェンスがある。

『冬のソナタ』第19話

『冬ソナ』第19話(父と子)は、主人公二人の別れのシーンで構成され、ドラマ全体を代表する場面である。2004年NHK放送分の番組を引用して、ロケ地となったソウル市の「市民の森」における撮影シーンを、シナリオで再現してみると以下ようになる。(抜粋)

[シーン1] 別れを決意したヒロインのユジン(유진)が、自ら設計した住宅の模型をチュンサン(준상)に渡すために公園(市民の森)を訪れ

る。

【シーン2】ユジンは赤色の三角屋根のある遊園地の木のベンチに座り、滑り台で遊ぶ子供たちを見ながら、物思いにふける。

【シーン3】ベンチに座っていたユジンは、小さな男の子が自分の手に持っている模型を見ているのに気づき、男の子と話をする。

【シーン4】ユジンは傍らの木立の前にたたずむチュンサンに気づく。

【シーン5】公園の白い丸テーブルでユジンとチュンサンが向き合う。

ユジン：元気だった？ (잘 지냈니?)

チュンサン：ごめんね ユジン。(미안해 유진아)

チュンサン：ユジン 大丈夫？ (너 괜찮아?)

ユジン：あなたは？ (너는?)

ピアノのテーマソングが流れる中で

ユジン：チュンサン 愛しているわ (준상아 사랑해)

ユジンの目からは涙が溢れ、チュンサンの目も潤む。

ユジン：ありがとう 本当にありがとう (고마워 정말 고마워)

チュンサン：僕も ありがとう ユジン (나도 고마워 유진아)

【シーン6】歌手 Ryu の歌が流れる中で、ユジンとチュンサンは公園の入口まで一緒に歩いていく。公園入口の緑のフェンスから、二人は後ろを振り返らずに、別々の方向へ歩いていく・・・。



「冬のソナタ撮影地」という小さな手がきの案内板のあるベンチ。

「市民の森」へ

南山タワーから南へ2 km程行くと漢江 (한강) に出る。そこから漢南大橋 (한남대교) を渡り、江南区 (강남구) と瑞草区 (서초구) の境を走る江南大路を南へ約5 km行くと、瑞草区の良才洞 (양재동) という地区がある。『冬ソナ』第19話は、良才洞の「市民の森」で撮影が行われた。

公園の敷地は、地図では三角形の形をしており、道路で南北に分かれていた。タクシーで公園の入口で降りると、ドラマの第19話の【シーン6】で別れの場所となった「緑のフェンス」が公園入口の歩道沿いに広がっている。主人公の二人が緑のフェンスの歩道を振り返らずに歩いて行った方向は、ヒロインのユジンが東で、チュンサンが西であった。ドラマを見た時には気づかなかったが、この方向はドラマの第20話 (最終回) における二人の結末を暗示していたのかもしれない。

緑のフェンスのある入口から公園に入ると、あちこちから鳥の鳴き声が出て、大きなカササギ (까치) が木立の中にたくさんの巣をつくっている。平日の公園に人を見かけることはほとんどなく、都会の雑踏とは違った静けさを感じる。まず【シーン2】が撮影された三角屋根のある滑り台と木のベンチのある場所を探しに行くことにした。公園の中ほどまで行くと、ドラマで見覚えのある赤色の三角屋根が見えてきた。第19話でユジンが木のベンチに座って小さな男の子と話したシーンは、公園内のミニ遊園地「子供広場」で撮影されていた。ヒロインのユジンが座ったベンチの後ろの木には、わずか10cm×20cmほどのピンク色の札 (案内板) がかけてあり、ハングルで「겨울연가 촬영장소」(冬のソナタ 撮影地) と書かれている。これほど小さな手書きの札では、地元ソウルの人でも公園に『冬ソナ』の撮影ロケ地があることを気づくことはない。

次にドラマの主人公の二人が別れの言葉を交わした【シーン5】の丸テーブルの場所を探しに行った。子供広場から南の出口の方へ向かって100mあまり戻ると、小さな煉瓦造りの売店があった。売店で買ったジュースやお菓子を食べるために、

店の横にいくつかの白色の丸テーブルと白イスが置いてあった。[シーン5]は売店から5mほど横に置いてある白テーブルで撮影されていた。冬ソナファンとしては夢にまで見たロケ地を目の当りにして、これ以上の感激はない。売店のご主人の話では、たびたび日本の団体客の人が来て、その後春川に行かれるとのことである。しばらくすると、白のテーブルの場所に数名の女性の方が来た。みな日本から来た人たちであり、感極まる気持は同じである。この場所で、チュンサンは柔らかな陽射を受けながら、木々の中からカササギの声を耳にして、ユジンの愛情の告白を聞き、涙を浮かべたのであった。

3月からソウルなどでは反日デモが続き、韓国のニュースでも、連日多くの時間をかけて報道している。しかし、その中でも、日本の冬ソナファンは、韓国の地を訪れている。ほんとうに素晴らしいことだと思う。両国の友好、親善のために、どんなに政治や経済の代表の方々が話し合いをしようとも、たった一本のテレビドラマに及ばないのである。人々の心を動かすには、言語、文化による相互理解こそが必要であることを痛感した。

静かな公園のベンチにいますと、突然、韓国の子供たちの賑やかな声がして、こちらに近づいてきた。小学生くらいの子供たちは、日本人旅行者を含めたすべての人に紙袋の贈り物を渡した。私は意味がよくわからなかったが、とにかく「고마워요」(ありがとう)と言って受け取ると、彼らは歓声を上げて去っていった。その日は復活祭(Easter)の日であった。子供たちは、日本人の私たちにまで、きれいな色のゆで卵が入った袋を配ってくれたのである。(本文の執筆にあたっては李周遠さんの協力を得ました。)

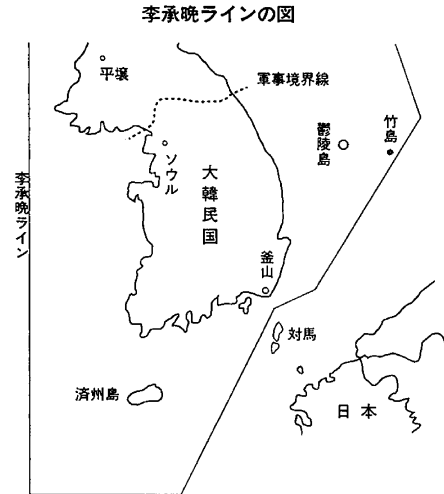
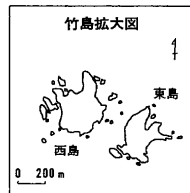
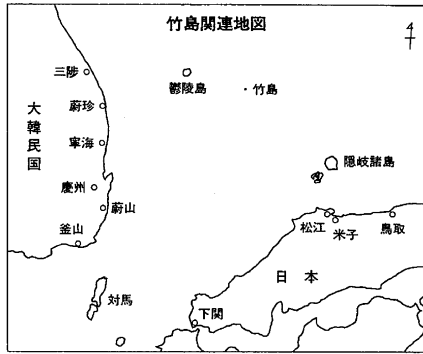
日韓関係の基礎知識

竹島問題って何だろう

法学部
常石 希望

(一) ここ数年間の日韓関係はワールドカップ共同開催や韓流・冬ソナブームなどを契機に、表面的かつ一時的な友好関係を呈してきた。しかしながら一步退いて見れば、上はどこまでもスポーツおよび芸能界現象としての接近にすぎない点も事実である。日韓関係の現実には、いまだに越えられていない「歴史認識の壁」およびそれに基づく諸問題が積み残されたままである。物事に「本・ほん」と「末・まつ」が存し、この関係が逆転している状態を「本末転倒」と言うのであれば、今日の日韓関係はかかる本末転倒をはらんだままの表層的友好関係化と称しうるであろう。これに対し、表題の「竹島問題」は「本」に属す。日韓両国における歴史認識の差が、もっとも具体的かつ先鋭的に交錯している、政治・外交上の領土問題であるからだ。なお、日本の「竹島」は、韓国では「独島・トクトー」と称す。従って日本側の「竹島問題」は、韓国側では「独島問題」となる。

地図に明らかなように「竹島・独島」とは、西島(男島)東島(女島)の2島からなる合計0.23平方キロ(つまり、一辺480mの正方形と等しい総面積)しかない小島にすぎず、しかもそそり立つ岩ばかりの絶海の孤島、水もなく、農地もなく、人が住めるわけでもなく、特に地下資源があるという島でもない。つまるところ、何も無い小岩礁にすぎないのである。にもかかわらず、この小島は戦後日韓両国の政治家たちの「悩みの種」であり続けてきた。そのため、戦後韓国政治史に



おける指導者たちのうち、朴正熙大統領あるいは金鍾泌氏などは、この問題の解決困難性と日韓関係への不利益を嘆き「こんな無用の島は、いっそダイナマイトで爆破して無くしてしまえ！」という有名な言葉を残した程である。残念ながら、この最良の解決策は今日に至るまで実現されていない。

それほどに、やっかいで複雑な「竹島・独島問題」をここで論じ尽くすことはできないが、以下おもに3つのポイント（あるいは3つのポイント時代）を中心にこの問題をできるだけやさしく素描してみたい。

(二) **第一**。一般に「竹島・独島」が世界史の舞台に出てきたのは、1952年「李承晩ライン（別名、李ライン）」の宣言によるとされる。李承晩（イ・スンマン、リ・しょうばん）とは韓国初代大統領の名であるが、韓国では「リ・ライン」などと言っても通用せず「平和線」と公称される。

ところで、なぜ李承晩はいわば「勝手に」このようなラインを設置しえたのであろうか。また、そのために生じた被害の大きさ（ダ捕された日本漁船300隻以上、抑留された日本人漁船員、約2800人、死亡した漁船員5名、沈没船3隻、返還されなかった船170隻）にもかかわらず、なぜ日

本は当初「李ライン」を黙認し、迅速な対抗策が取れなかったのであろうか。

実は「李ライン」とは、1946年のいわゆる「マッカーサー・ライン」の踏襲にほかならなかったのである。具体的に言えば、戦後GHQは「訓令、第767号」を発令し「竹島（独島）は韓国の領土とする」という決定を下した。つまり、第2次大戦の責任国であるドイツが東西に分割されたように、日本には樺太（サハリン）をはじめ北方領土や竹島を「領土から除外」する、というのが連合国側の意志であり決定であった。ただしGHQ訓令767号（竹島を韓国領とする）は暫定決定であり、後のサンフランシスコ講和条約（1951年）において最終決定化されるものと見なされていた。事実、当初の「サンフランシスコ講和条約」の「草稿」でも「竹島（独島）は日本の領土から除く」（従って、韓国の領土とする）ことが決定、明文化されていた。ところが、日本側は強力な工作を行ない、特に当時の駐日政治顧問シーボルトに強く働きかけ、同上「草案」の改訂を求めた。しかもアメリカ国務省は、この草案改訂を最終的に受け容れ「竹島（独島）を日本の領土とする」という改訂草案を決定してしまったのである。これが、現在私たちの手元にあるサンフランシスコ講和条約・第2条（a）である。

もとより、上の改訂草案を講和条約締結の数ヶ月前に知った韓国側は、10項目にわたる「覚書」

をアメリカに送るなどして、これに激しく抵抗したのは言うまでもない。しかしながら、韓国は第2次大戦において日本と戦った国ではないという理由で当初から同講和条約の関係対象国からは外されていた点。また、1950～51年と言えば韓国は「朝鮮戦争」の真只中にあり、国家の命運をかけて北朝鮮と戦っていた時であり、他の外交問題などは二次的問題であった点。これらの点も作用し、ついに、国際政治という苛酷な大国主義利害中心の渦の中で、韓国側の要求は無視され棄て去られてしまった。

「平和線（日本の言う李ライン）」は、こうした経緯を経て1952年（サンフランシスコ講和条約の翌年、また日本による植民地侵略からの解放7年後）に、韓国側が一方向的に宣言・実施した「恨みのライン」にほかならないのである。「恨み」の対象は、日本である。また、日本と共謀して草案を書きかえた国際社会である。その後、日本はサンフランシスコ条約をタテにし、国際法に照らして「竹島は日本の領土」と主張し、国際裁判所にこの問題を「合法的」に提訴することを韓国側に求めてきた。しかし、元々そんな国際法や合法性に裏切られてきた韓国側は、当然ながらかかる交渉を一切拒否し続けている。

（三）第二、江戸時代から明治初期まで。その後「日韓基本条約1965年」「日韓漁業協定1965年」などを経て、現在「竹島・独島」水域は“日韓が共同管理する暫定水域”と定められ、1999年には新しい「日韓漁業協定」が発効している。しかし、領土問題そのものは未解決のままであり、「独島」は「大韓民国、慶尚南道鬱陵郡」という住所登録されるとともに、「竹島」は「日本、島根県隠岐郡五箇村」に登録されている。つまり同一の島を日韓両国がそれぞれ自国の領土として記録し、しかも両国は互いにその主張を黙認することによって、かえって平和を保とうとしているのである。

かかる事態を、もし仮に「異常」と称するのであれば、実は同じ異常現象がすでに江戸時代において日朝の間で展開していた。時代は1693年、第5

代将軍徳川綱吉の治世、朝鮮王朝は第19代肅宗王の世。この時、争点となった島は「竹島・独島」ではなく「鬱陵島・うつりょうとう、ウルルンドー」。先の地図からも分かるように「鬱陵島」は竹島よりはるかに大きい島であり、現在も韓国人約2万人が居住する島である。水田、畑作に加え漁業が盛んで、昨今は観光地としても知られている。古代「于山、ウサン、かんさん」国という独立した国が存したが、6世紀新羅に統合され、以後朝鮮王朝時代には「于山島」「鬱陵島」あるいは竹を産出する島として「竹嶋」「礪竹島」「武陵島」などと称されたが、この鬱陵島は6世紀以来の韓国・朝鮮の領土であり、例えば『東国輿地勝覽』所収「八道総図、1481」の地図にも明示されている。

しかし、朝鮮時代前半300年余この鬱陵島には「空島政策」、すなわち誰一人として国民を住まわせず、島をカラにしておく政策がとられた。これは王朝の厳しい鎖国政策、および深刻な倭寇被害への対策による。そこへ、秀吉による文祿慶長の役（1592年～）以降、現鳥取県の漁民が訪れ始め、やがて江戸幕府は鳥取藩を介してこの「空島」を日本の領土だと認識し始め、「竹島」という名称を与える（江戸時代、日本は現鬱陵島のことを竹島と呼んでいた）。その間、安龍福の2度にわたる来日を経て、1690年代両国の鬱陵島をめぐる領土交渉が始まるが、この時の両国の対応、特に朝鮮王朝の対応は興味深い。“鬱陵島は古来朝鮮の領土であり、倭人の言う竹島のことであるが、鬱陵島には三つの島が存するので、それらの一つを鬱陵島とし、他の一つを竹島とすれば、それぞれ両国の名分が立つではないか”というものであった（『肅宗実録』肅宗19年の条）。もとより、この時は朝鮮側の領土であることが明白であったため、結果的には決着がつく。しかし、鬱陵島という同一の島を一方は竹島、他方は鬱陵島と称し、実質上両国が自国の領土として認識することで、平和が保たれるのであればそれでよいのではないのか、という注目すべき解決策をとったのである。

ところで上からも一部わかるように、現鬱陵島、現竹島・独島の歴史上の名称は実にややこしくて混乱している。図示してみたい。

《日本側の名称》

現「鬱陵島」...竹島(竹嶋) —————→ 松島(竹島)

【江戸時代】

【1900年~】

現「竹島」...松島(竹島) → リャンコ島 → 竹島(松島)

《韓国側の名称》

現「鬱陵島」...于山国 → 于山島, 鬱陵島(竹島) → 鬱陵島

現「竹島」.....(于山, 于山島) → リャンコ島 → 独島

以上に加え、現鬱陵島の属島の一つが「竹島」と称されてきた点(地図, 参)が、さらに混乱に拍車をかける(この属島「竹島」は江戸時代一部の日本側漁民は「松島」とも称したと言われる)。従って過去の歴史資料に根拠を求めようとしても、それがどの島のことを言っているのかという点で合意を得るのは難しい。例えば「竹島・独島問題」で、かならずと言ってよいほど引き合いに出される歴史資料の一つ、『東国文献備考(1770年)』第一篇「輿地考, 分註」には「輿地志に言う、鬱陵、于山、皆于山国の地。于山は、則ち倭の所謂松島なり」とある。これを、素直に読めば「竹島、独島」は朝鮮の領土ということになる。しかし「于山」および「松島」を現鬱陵島の属島のことだと読もうと思えば、それも不可能ではない。他にも『肅宗実録, 肅宗22(1696)』、『隠州視聴合戦(1667, 日本側の資料)』、明治新政府成立後、外務省出仕佐田白茅が作成した『竹島松島, 朝鮮附属二相成候始末(1870)』など重要な歴史資料には、「竹島・独島」の海図上の位置関係、距離、地図が示されておらず、ただ島の名称が示されているにすぎない。その限り、歴史資料にはおそらく最終決定能力は存しないであろう。——江戸時代には「鬱陵島」をめぐる両国の若干の紛争が存したが、これは平和的に解決しており、一方「竹島・独島」に関する領土問題は未だ起きてもいなかった。

(四) 第三, 1900年~。「竹島・独島」が日韓両国で注目され、次に領土紛争が起こるのは1900年・20世紀初頭のことで、航路の中継地およびアシカ獺の価値が認識され始めてからのことであった。韓国側がこの島を「独島」と呼称し始めたのは1904年頃だと思われるが、これに対し日本がこれを公式に「竹島」と命名し、しかも「島根県所属隠岐島司ノ所管」と記録し、日本の領土に組み入れたのは1905(明治38)年のことであった。韓国側は、これを日本側の一方的な侵略だとして、今日に至るまで批判し続けている。

問題の核心は、1905年頃という「時」にある。朝鮮半島の北部を兵站基地とした日露戦争は1904年、翌1905年には第2次日韓協約(乙巳保護条約)を伊藤博文が強行し、独立国としての地位を韓国から奪い、翌1906年には朝鮮統監府が設置、伊藤が初代統監に就く。当時、すでに鬱陵島には300人程の日本人が日本人町を形成して定住して、鬱陵島の領土問題が生じ、これら一連の「侵略」に対して韓国は過敏になっていた。そこへもって、上述の1905年「竹島」日本領宣言であった。また1910年には朝鮮半島のすべてを日本に合併し収奪した。——そのため、韓国側には今日に至るまで「日帝による侵略の始点・独島」という認識が成立している。日本はまず「独島」を奪い、そのうち朝鮮半島全体を奪ったのだという図式である。従って韓国にとって「独島」は単なる領土紛争の島ではなく、むしろ日本による侵略史そのもの、日帝植民地支配36年間そのものを「象徴」する特別な意味が込められた島なのである。そうした「歴史認識」に直結した島なのである。日本人にとっては単なる漁業権をめぐる領土紛争の島であるのに対し、韓国人にとってはその島を日本人に奪われようとするのは、すなわち過去36年間の「民族の恥辱」への回帰、あるいは日帝による「再侵略」という意識へと直結する島なのである。そのため「独島問題」は、韓国においては国民的関心事であり、子供でさえよく知っている問題であるのに対し、日本では一地域の関心にすぎず、ほとんどの国民がこの内容さえ知らない問題にす

ぎない。

(五) 現状と解決策。

以上のごとく、「歴史的」および「資料的」にこの問題に最終決定を与えることは不可能に近い。現在、日本側の「強み」はサンフランシスコ講和条約の最終版をタテに取って、国際法および国際社会に訴えうる点である。同講和条約では「竹島は日本の領土」としたからであり、事実「李ライン」に対してはアメリカを先頭に中国も含めた国際社会はこれを批難した。他方、韓国側の「強み」は朝鮮戦争以後50年以上におよぶ独島の「実支配」の事実である。独島には種々機材が投入され、接岸設備や灯台、宿泊施設などが建設され、韓国警備隊が駐屯しており、さらには愛国者が居住さえしている。また上述したように、この問題が韓国では、「日帝植民地」そのものを象徴する全国的関心である点も韓国の強みと言えなくはない。

こうした現状のなかで、この問題を冷静な話し合いで解決しうる見込みは皆無に近い。果して「竹島・独島」問題には、こうした現状下、どのような解決策が可能であろうか。

テレビにもよく登場している重村智計教授（日朝関係論）は、この竹島・独島問題を実は「すでに一応の解決の道筋で双方が合意している問題」だと見る（『韓国ほど大切な国はない』東洋経済新報社、1998）。つまり、両国は互いに自国の領土だと主張し記録しつつ、しかも現実的には「李ライン」はもはや解消され、竹島水域は日韓が共同管理する「暫定水域」として合意しており、それにふさわしい「漁業協定」が施行されているのであれば、これは現状下における一つのもっとも好ましい解決にほかならない、と見るのである。日朝関係論の専門家や、竹島問題の根の深さを知る人間には、この種の解決方策を取る者が多い。もとより、それが最終的解決ではないことは百も承知の上だ。しかし、今すぐ「シロ、クロをつけよう」とする態度こそ、実はかえって「竹島・独島問題」への「解決」から最も遠いのである。（なお、この問題にさらに関心のある学生諸君に

是非すすめたい一冊の本がある。下條正男『竹島は日韓どちらのものか』文春新書、2004。類書がまったくと言ってよいほど存在しないなか、本書の価値は高く、その内容もきわめて秀れている。本稿の「地図」も同書から引用掲載させていただいた）。

メキシコの定番デザート、 チュロスとチョコレート

経営学部

丸谷雄一郎

私が本格的なチュロスと出会ったのはメキシコの高原都市として有名なサン・ミゲル・デ・アジェンデのサン・アグスティン (San Agustin) というカフェであった（カフェの住所など詳細は、『フィガロ・ジャポン』2004年6月5日号114頁を参照）。メキシコというとソブレロや常夏というイメージを持つ人が多い。しかし、メキシコシティを含めてその中心部は高地であるため、ソブレロのイメージ通り日差しは強いのだが、気温は高くはなく、メキシコシティなどを訪れるとその涼しさに驚く人が多いのである。中央高原は植民地時代に銀などの資源を求めて多くの都市が作られ、メキシコの独立運動やその後のメキシコ革命の際にも中心となった地域である。街並みの多くは近年世界遺産に指定され、観光地として再び注目を集めている（メキシコの高原都市について詳細は、邸景一、飯田辰彦、原川満『メキシコ・中央高原～コロニアル・シティーの魅力（第2版）』日経B P社、2005年を参照）。

サン・ミゲル・デ・アジェンデはメキシコ中央高原の中心都市グアナフアトから東へ、車で2時間程の植民地時代の面影が強く残るコロニアル都市である。メキシコ人が「最も美しい都市」と称するだけあり、カラフルな建物と坂の多い石畳が印象的な街並みを作っている。日本でも公開されたアントニオ・バンデラス主演の『レジェンド・オブ・メキシコ』はここを主要なロケ地としており、米国人が持つメキシコを象徴している。近年、多くの外国人が有名な美術学校（アジェンデ美術学校）や現地の語学学校に留学し、さわやかな気候や現地の芸術的な雰囲気惹かれて移り住むようになった。そして、彼らが経営する洗練されたインテリアショップに観光客が大挙押し寄せ、その観光客目当ての店舗が多く開店するというサイクルが生まれている。

サン・アグスティンもこうしたサイクルに乗って開店した店舗であり、サンフランシスコ教会のすぐ前に立地する。オーナーは有名なTV女優マルガリタ・グロリアさんであり、店内にはオーナーの写真が多く飾られている。オーナーは店に頻繁に来ているようであり、私がお店に行った時にも店長らしき人と打ち合わせをしていた。内装はこの街のコロニアルな雰囲気に惹かれて詰め掛ける米国人を標的としているためか、米国人がイメージするメキシコそのものである。外壁はチョコレート(ホットチョコレート)を思い起こす薄い茶であり、内壁は薄い黄色で塗られ、棚や壁には大きな

皿などの陶器が飾られ、木の格子状になっている。天井にはサン・ミゲル特産のかごなどの民芸品が飾られている。

チュロスは植民地時代にスペインからメキシコに流入した、薄力粉と強力粉の生地をあげたものにシナモンシュガーをまぶしたデザートである。メキシコの屋台のデザートとしても定番のスイーツであり、日本でもミスタードーナツが製品化している。しかし、サン・アグスティンのチュロスは日本のチュロスと見た目は同じなのだが、味が全く違った。食感がサクサクでありながら、噛むともちもちしていて、シナモンが後味を上品に仕上げていた。先日、ニューヨークで本場のベーグルを食べて驚いたのと同じ感覚だったのだが、食感というのは大量生産ではまねるのが難しいらしい。厨房はオープン・キッチンとなっており、職人のおじさんがところてんを押し出す時に使う機械を大きくしたようなもので、チュロスの生地を油の中に押し出し、手際よく引き揚げ、シナモンシュガーを振っていた。おじさんはメキシコ人らしく非常に楽しそうに仕事をしており、私がどのように作るのかと見ていると、「どこから来たんだ」と愛想良く話しかけてきた。

このスペイン生まれのデザートと絶妙にマッチするのがチョコラテなのである。チョコラテはフレンチ、スパニッシュ、メキシコと名づけられ3種類あり、唐辛子風味の甘くないチョコラテがチュロスとは非常によくあうのである。日本でもジャ

ン・ポールエヴァン、パスカル・カフェなどフランス出身の高級チョコレート店がホットチョコレートを提供し話題となっているが、チョコレートは日本ではまだまだ菓子というイメージが強いのではないかと思う。メキシコでは菓子としてだけではなく、モーレソース(チョコレートをベースに何種類もの唐辛子などのスパイス・ナッツなどを混ぜたメキシコ料理の定番のソースで、メキシコシティ近郊のプエブラの名物)の原料として利用されたり、飲料として飲むことも一般的



チュロスを味わう筆者



チュロスを揚げる職人

なのである。チョコレートは欧州発とされているが、チョコレートの原料カカオは中南米産であり、古代メキシコのアステカ族はカカオ豆をアステカ文明の神ケツアルコアトルの授けた万能薬として珍重していたそうである。

メキシコの高原都市は美しい。ぜひ、美しいコロニアル・シティーを訪れて、宗主国スペイン生まれのチョコロスとメキシコの植民地時代以前の伝統を受け継ぐチョコラテを味わってみてはいかがでしょう。メキシコの歴史の一端が感じられると思います。

最も長い英単語

経営学部
安藤 聡

ある日レディングからベイズィングストウクに向かうローカル線にひとりで揺られていた。終点に近い小さな駅から、妙に背の高い労働者階級風の青年が乗ってきた。車内は空いていたが、青年は何故か私と向かい合わせの席に座った。だがもうすぐ降りるのだし、この手の連中はどうせ聞き取りにくい英語を話すに決まっているので、話しかけられると面倒だから私は彼と目を合わせないようにしていた。すると唐突に彼は、「一番長い英単語は何か知ってるか?」と問いかけて来た。訛りは強いが聴解に支障を来すほどひどい発音でもなかった。私は聞こえないふりをすることなく会話に応じることにした。「floccinaucinihilipilificationだろ」と私が答えると、青年は「違う、

antidisestablishmentarianism だ」と言う。私は floccinaucinihilipilification の方が一文字多いこと（前者は29文字、後者は28文字）を知っていたので、彼の思い違いを正してやろうとしたが、彼の方から矢継ぎ早に「どこから来た?」とか「留学か、仕事か?」などと質問を連発して来たので、「日本からだ」、「仕事でレディング大学に来ている」などと答えているうちに列車はベイズィングストウクに到着してしまった。青年は「話が出来て楽しかったよ」と言い残して去って行ったが、私には釈然としない気分が残った。

この floccinaucinihilipilification という語は18世紀の詩人・随筆家ウィリアム・シェンストン(1714~63)の造語と考えられている。意味は「軽視すること」、「無価値と判断すること」である。シェンストンは1741年のある日友人宛に書いた手紙の中である人物について、「私が彼を好きだったのは、とりわけその金を何とも思わない態度のゆえだ。」(I loved him for nothing so much as his flocci-nauci-nihili-pili-fication of money.)と書いている。ここでこの詩人はハイフンを入れて綴っているので語源がよりいっそう明確になるが、flocci はラテン語で「羊毛の房」から転じて「軽いもの」とか「価値のないもの」、nauci は同じくラテン語で「つまらないもの」、nihili もラテン語で「無」(参考までに 'nihilism' は「虚無主義」)、pili は「毛」から転じて「些細なもの」、-ification は「~化すること」である。つまりシェンストンが手紙の中で言及している「彼」という人物は、金というものを「一房の羊毛か一本の毛のごとく軽く、取るに足らない無価値なものと判断していた」のである。シェンストンが何故このような単語を思いついたかという点、一説によれば、名門パブリック・スクールであるイートン・コレッジのラテン語の単語帳に、「flocci」、「nauci」、「nihili」、「pili」がこの順序で並んでいたことに由来するという。そう言われて見ると、確かにアルファベット順になっている。

おそらくはシェンストンの書簡集を読んで真似たのであろうが、詩人口バート・サウジー

(1771~1843) は1816年に季刊誌『クォーターリー・レヴィウ』に寄稿した記事の中でこの単語を使っている。但しこの用例は『オクスフォード・イングリッシュ・ディクショナリー』には引用されていないし、その季刊誌も手許にないのでここにその例文を紹介することは出来ない。一方で小説家ウォルター・スコット (1771~1832) は1829年3月18日付の日記の中でこの語を3回用いているが、3回とも間違えて7文字目の'n'を'p'と綴っている。『OED』に引用されているのはその日記の中の次のセンテンスである。'They must be taken with an air of contempt, a floccipaucinihilipilification [sic] of all that can gratify the outward man.' この文脈で'they'とは「葉巻とウィスキー」であり、そういったものを人は「軽蔑を込めて嗜むべきであり」、つまり「人間の外面的な肉体を喜ばせるようなあらゆるものに対する軽視」が必要だと、スコットは主張しているのである。

他方のベイズィングストウクの一青年が一番長いと主張する *antidisestablishmentarianism* は、強いて言えば「反国教会廃止論」ということになる。国教会を廃止しようという主張に対する反対論、である。この語の意味を考えるには、まず中心にある 'establishment' に注目しなければならない。ここでは「イングランド国教会」を指す。そもそもこの宗派は、悪名高きヘンリー八世が妻と離婚して愛人と再婚するために設立したものである。大英帝国が世界に君臨した19世紀には、国教会の制度そのものにさまざまな矛盾が露呈するようになった。そこで国教会の解体を主張する人々や、そこまで行かなくとも現状維持に反対する人々が現れた。この人たちがこそが *disestablishmentarian(s)* であり、こういう人たちの思想・主義が *disestablishmentarianism* である。そうなるとう当然、そのような考えに反対する人々、つまり国教会を擁護する立場の人々も黙ってはいない。このような人々の思想・主義が *antidisestablishmentarianism* なのである。

これら二つの単語は『OED』初版に収録され

た語彙のうち長いものの第一位と第二位であった。『OED』第二版にはこれらより長い語がいくつか収録されていて、そのほとんどが医学用語である。例えば *floccinaucinihilipilification* よりも一文字分だけ長い *pseudopseudohypoparathyroidism* というのがあり、遺伝性の骨格の障害の一種らしい。日本語でこの疾患を何と呼ぶのかは私には判らない。また、これは長い単語としては割にポピュラーなものだが、*pneumonoultramicroscopic-silicovolcanoconiosis* という病名があり、『プログレッシブ英和中辞典』(小学館)にも収録されている。日本語では「珪性肺塵症(けいせいはいじんしょう)」と呼ばれ、炭坑夫が罹りやすい病気だそう。『プログレッシブ』には「実用的な英語では最長単語とされる」と記されている。これは45文字あり、これまで挙げた例よりも圧倒的に長い。病名はたいていラテン語をつなげて作られるので、理論上はいくらでも長くなり得る。実際に『OED』にこそ掲載されていないものの、1913文字からなる病名も確かに存在するらしい。そのようなわけで、『プログレッシブ』には悪いが、「一番長い単語」というときには病名は除外しないと面白い。

『OED』第二版に収録された *floccinaucinihilipilification* よりも長くて病名でない単語としては、34文字からなる *supercalifragilisticexpialidocious* を挙げるができる。しかしこれも「無意味な語」と定義されていることから、正統な「最長単語」とはみなさない方がよかろう。これはディズニー映画『メアリー・ポピンズ』(1964。ちなみにこの映画はP・L・トラヴァーズの原作に対する冒涇でもある)の中でジュリー・アンドリュースがまじないの言葉として歌って有名になったものである。語尾が '-ious' で終わっているから形容詞であろうが、「無意味」とはいえ『OED』の定義では「大いなる是認を表わす」とされているので「素晴らしい」くらいの意味はあるのであろう。無意味な言葉としてこの映画以前から主に子供らの間で使われていたという。また1951年に発表されたフォークソングに 'Supercalafaja-

listickespeealadojus; or the Super Song' というタイトルのものがあり、この作詞者（パーカーとヤングという二人組らしい）は1965年にこの語の著作権を主張してディズニー・プロダクションを訴えた。しかしそれぞれが似ているようで微妙に異なっていたことから、結局は原告敗訴に終わった。また1971年11月6日付の『デイリー・テレグラフ』紙ではこの単語が次のように使われている。'If you can stand more than a day of supercalifragilisticexpialidocious entertainment you can settle in at the concrete Contemporary Resort Hotel.'

固有名詞を含めれば、これまでに挙げた例よりも長いものはいくつかある。有名なのはウェイルズの地名 Llanfairpwllgwyngyllgogerychwyrndrobwlllantysiliogogoch (58文字) であろう。尤もこれは二つの村が合併して両方の名前をそのままつなげたためにこれほど長くなったのであり、前の39文字（それでも十分に長い）と後ろの19文字（それでもまだ長い）に分けられる。途中のエルが4文字連続するところの中間がその切れ目である。地図上では最初の12文字のみ表記されるか、あるいは Llanfair P. G. と略されることが多い。だがかつて一週間だけ、ウェイルズにはこれより長い地名が存在したことがある。それは2004年7月のことで、チェスターの南西にある Llanfynydd（敢えてカタカナで表記すると「サンヴァニッツ」ということになるが、最初の「サン」はウェイルズ語特有の音、最後の「ズ」は英語でいう 'th' の有声音である）という村が一週間に亘って、Llanhyfryddawelllehynafolybarcudprindanfygythiadtrienusyrhafnauole と、公式な地名として名乗っていたのである。数えてみると66文字あるから、Llanfairpwllgwyngyllgogerychwyrndrobwlllantysiliogogoch よりも8文字長い。この改名は、風景美と絶滅危機種の動植物を併せ持つこの地域に、寝耳にミミズのごとく風力発電所建設計画が持ち上がったことに端を発する。発電所建設に反対するための運動を世にアピールすべく、その存在を目立たせるためにわ

ざと長い名前を名乗ったということである。ちなみにこの長い名前の意味はウェイルズ語で「卑劣な羽根（刃）の脅威に晒された稀少な鷹の棲む歴史的に重要な教会があるきわめて美しい村」であるらしい。いずれにせよ固有名詞ということになると、これもいくらかでも長くしようと思えば出来るので、最長単語としては面白味に欠けると言えよう。

長い単語といえば他にも、同じ文字を二度繰り返さないという限定つきの最長語として、dermatoglyphics と uncopyrightable（いずれも18文字）がある。前者は「掌紋学」（手のひらの皮膚の隆起に関する研究らしいが、手相占いとは違うと思う）、後者は「著作権を取ることが出来ない」という意味である。また、古典的なジョークとしては、最長の単語は smiles である。なぜなら最初と最後の s の間に1マイル（約1.6キロ）の距離があるから。それならば beleaguer の方が be と r の間が1リーグ（約4.8キロ）だからこっちの方が長いではないか、という反論もあるが、前後の文字が同一でないし、リーグといわれても俄にイメージできないので、smiles ほど面白くない。こういう話は事実として長いかな否かよりも、面白いかどうかの方が重要なのである。



ベイズィングストウク駅（ハンブシャー州）

(海外最新事情)

イギリス

(1) 紅茶文化の衰退

英国における「伝統的な紅茶」の消費量が減少しているらしい。ここで言う「伝統的な紅茶」とはハーブ・ティーやフルーツ・ティーなどを除いたいわゆる英国で昔から飲まれている紅茶のことである。『タイムズ』2005年5月18日号に‘Coffee and fizzy drinks are now our cup of tea’ という標題の記事があった。この標題の‘our cup of tea’ というのは「私たちの好むもの」という意味である。英語で‘one’s cup of tea’ というのはよく使われるイディオムであり、たとえばある女優について‘She is not my cup of tea.’ と言うと、「(あの女優は) 私の好きなタイプではない」という意味だ。この『タイムズ』の記事では、このようなイディオムに使われるほどに英国の文化に深く根ざした‘tea’ という飲み物に代わって、コーヒーや炭酸飲料が英国人にとっての‘our cup of tea’ になりつつある、ということを伝えているのである。

この記事によると、過去二年間で英国における「伝統的紅茶」のティーバッグの売り上げが16パーセント、ルース・ティー (loose tea: 袋に入っていない茶葉) のそれが9パーセント減少したという。1999年には紅茶の総売上が年間7億700万ポンドだったのに対して、2004年には6億2300万ポンドに落ち込んでいる。ミネラルウォーターや清涼飲料の普及のために紅茶を飲む習慣が若い世代に根付かなかったことが影響していると考えられている。

一方でカフェインを含まないハーブ・ティーやフルーツ・ティーの売り上げは50パーセントも上

昇している。これらは特に若い世代に洗練されたイメージの飲み物として好まれていることに加えて、伝統的紅茶は通常牛乳と砂糖を入れて飲むために脂肪分と糖分の摂取を避けられないので敬遠されて、このような「健康的な」茶が好まれていることがその理由である。また珈琲の台頭も無視できない要因であろう。確かに20世紀末ころから英国の主要都市にスターバックスやコフィー・リパブリックといった珈琲店が急速に数を増やし、紅茶よりも珈琲を好む若者が増えていることは事実である。

それでも英国国民の80パーセントは習慣的に紅茶を飲んでいて、この数値は65歳以上に限定すると85パーセントになる。15歳から24歳では75パーセントに留まるが、それでも決して小さい数値ではない。別な統計によれば、英国全土で一日に二億杯以上の紅茶が飲まれているという。第二次世界大戦が終わって以来、紅茶に限らず様々な英国の「伝統」が衰退していると言われて久しいが、この数値を見る限り紅茶に代表される「伝統」はそれほど柔なものではないように思われる。

(2) 地球温暖化が伝統的ファーストフードに及ぼす影響

地球温暖化 (global warming) の影響で、北海に棲息する魚類がより冷たい水を求めて北上していることが明らかになった。2005年5月13日の『インディペンデント』の記事によれば、過去25年の間に cod や haddock (いずれも鱈の一種) といった「商業的に重要な魚 (commercially important fish)」を含むおよそ15種類が、その棲息域を北に移しているという。コッドやハドックがなぜ「商業的に重要」なのかといえば、これらは英国の伝統的ファーストフードであるフィッ

シュ・アンド・チップスの二大定番メニューだからである。

コッドの棲息域はこの四半世紀で73マイル（約117キロ）北上し、ハドックの棲息域の南限も65マイル（約104キロ）北に移動した。イソギンポ（snake blenny）に至ってはその南限が250マイル（約400キロ）も北上したという。小型で寿命が短く、ライフサイクルが短い種類ほど北上の度合いも大きいらしい。一方で bib（小型の鱈）や scaldfish（小型のヒラメ）など、元来は北海よりも南に棲息していた種類が北海まで北上して来ている。イースト・アングリア大学の海洋生物学者アリスン・ベリー博士は、このままでは2080年までに北海からコッドが完全にいなくなりビップばかりになる、と話している。

北海に棲む魚類の棲息域北上は年間平均して1.4マイル（約2.2キロ）ずつ進んでいるという。この速度は、蝶や鳥や高山植物が同じく温暖化の影響で北上している速度の4倍らしい。地球温暖化がこのまま進めば北海の水温は2020年までに平均して0.5度から1度上昇し、さらに2050年までに1度から2.5度、その後2080年までに4度上昇すると推測されている。2080年のフィッシュ・アンド・チップス店にコッドはあるのか、それともビップに取って代わられているのか、あるいはマクドナルドやケンタッキー（さもなくば現在の私たちが想像もしないような新奇のファーストフード店）に淘汰されてこのような伝統的ファーストフード店自体がなくなってしまっているのだろうか。フィッシュ・アンド・チップスは私の好物でもあるので、英国の伝統はそれほど柔ではないと信じたい。（安藤 聡）

ドイツ

日本におけるドイツ年について

「日本におけるドイツ年」というものを皆さんはご存知でしょうか、これは正式には「日本におけるドイツ2005/2006」といって、2005年から

2006年にかけて精力的に日本においてドイツの紹介を行う企画です。300件を超える実に多様な催しが計画、あるいはすでに実行されていて、ここではすべてを紹介することは不可能ですが、そのなかからいくつかを紹介したいと思います。この企画の全体あるいは個々の企画のさらに詳しい情報を知りたい方は、公式ホームページ（http://www.doitsu-nen.jp/index_JA.html）を参考にしてください。

まず現在のドイツの文化活動を紹介する試みとしては、先端のデザイナーたちの仕事を集めた「ドイツ・デザイン・ラボ」や、日本ではなかなか見ることのできなかつたドイツ映画を一挙に集めた「ドイツ映画祭2005」があります。

しかしドイツの魅力は何といっても芸術の分野にあります。美術、すなわち造形芸術に触れたいという人にお勧めなのが、「ベルリンの至宝展」（東京国立博物館 4 / 5 ~ 6 / 12, 神戸市立博物館 7 / 9 ~ 10 / 10）と「ドレスデン国立美術館展」（兵庫県立美術館 3 / 8 ~ 5 / 22, 国立西洋美術館 6 / 28 ~ 9 / 19）です。「ベルリンの至宝展」は、世界有数のコレクションを楽しむだけでなく、戦火のなかで惜しくも焼失、紛失してしまった数々の傑作や、略奪の対象になるなど戦争に翻弄された美術品の数奇な運命について思いをめぐらす機会にもなるでしょう。

また「ドレスデン国立美術館展」は、ドイツ有数の歴史を誇るコレクションを紹介するものです。このコレクションが現在の建物に移ったのは1855年のことですが、すでに1560年（！）に宝物室が整備され、1722年には総目録が完成して、18世紀の後半には外国人旅行者や美術アカデミーの生徒に観覧が許されていたという伝統あるものです。このコレクションの持ち主であるザクセンのヴェッティン家は有力な一族でありながら、プロイセンのホーエンツォレルン家やバイエルンのヴィッテルスバッハ家のようにドイツの覇権をめぐる争いに野心をもたず、内政に専念することによって国力の充実を図りコレクションの充実にも努めたのです。

もちろん音楽や演劇に関しても盛りだくさんの企画が用意してあります。たとえば名門バイエルン国立歌劇場によるズービン・メータ指揮の『タンホイザー』、『ニュルンベルクのマイスタージンガー』や初来日のシュツットガルト歌劇場によるコンヴィチュニー演出の『魔笛』、これらは定番中の定番ですが、その他世界最古のオーケストラであるゲヴァントハウス管弦楽団のメンバーによるライブツィヒ室内管弦楽団などさまざまな管弦楽団、室内楽団による公演が各地で予定されています。

また演劇ではベルリナー・アンサンブルによるプレヒト作『アルトゥーロ・ウイの興隆』、ベルリン・シャウピューネによるトーマス・オスターマイアー演出の『ノラ』などの公演も準備されています。

すばらしい企画が盛りだくさんですが、いくつか残念な点があります。一つは非常にドイツらしい欠点ですが、それは広報活動が十分ではないということ、これらの企画のうちでいったいどれくらいのものが一般の人に知られているのかと思うと非常に心もとないものがあります。もう一つは、これは逆にドイツらしからぬ欠点で、ほとんどすべての企画が東京を中心とする首都圏（一部は神戸）に集中しているということです。これは地方分権の伝統を持ち、何事にも一極集中・中央集権を嫌うドイツ人らしからぬことであり、それだけにいっそう残念に思われます。それでも一見の価値のあるものばかりですから、東京などに出かける機会があればぜひ足を運んでみてください。

(島田 了)

けないが、ヨーロッパではほとんど毎日のように何らかの記事が報道されている。

ご存知のとおり現在 EU は、アルファベット順に、オーストリア、ベルギー、キプロス、チェコ、デンマーク、エストニア、ドイツ、ギリシャ、フィンランド、フランス、ハンガリー、アイルランド、イタリア、ラトビア、リトアニア、ルクセンブルク、マルタ、ポーランド、ポルトガル、スロバキア、スロベニア、スペイン、スウェーデン、オランダ、英国、となっている。これだけの国が、一つの経済圏（ただし、英国、デンマーク、スウェーデンはまだ通貨統合していない）としてだけでなく、政治上も一体となろうとしている。そのためにはどうしても憲法が必要である。まさしく EU 発足以来の悲願といえるだろう。

ところが、EU 発足から拡大へ向けて、先頭に立って奮闘してきたフランスが、EU 憲法批准のための国民投票で、大ピンチに陥っている。3月18日に行なわれた世論調査では反対派が賛成派をほんのわずかに上回るという結果が出てしまった。

反対派の意見もさまざまである。EU 憲法に批准してしまうと、フランスの主権が失われてしまう、といった EU 発足当時から言われている意見から、国会議員のスキャンダル（フランスも日本に劣らず国会議員のスキャンダルが多い）に対する批判票やさまざまな内政政策に対する不満票としての反対票など、EU 憲法批准の是非とは関係のない理由による反対まで多種多様で、実際には確固とした反対の論拠は見当たらない。むしろ、「フランスがなくなって EU になってしまう」といった漠然とした不安が反対ムードを作り上げているように思える。

しかし、万一フランスの国民投票で EU 憲法批准が否決されてしまうと、シラク大統領のメンツがつぶれることなど小さなことだが、今後の EU の舵取りが難しくなってしまうことは明らかだ。EU 内でのフランスの発言力は当然下がるだろう。フランス国民が EU 憲法を認めないまま、フランスが EU 内でどのような役割を果たすことが出来るかと考えただけで、この国民投票で反

フランス

EUとフランス

—EU憲法はフランス国民投票で批准されるか—

フランスで今最も注目されているのは EU（欧州連合）憲法が批准に必要な過半数を5月29日のフランス国民投票で獲得できるかどうか、だろう。日本では EU の話題は比較的地味な扱いしか受

対が成立すれば、フランス一國に留まらず、ヨーロッパ全体、ひいては世界の政治体制、経済体制への影響が少なくない。EU憲法批准の是非については、フランス以外でも反対が成立する可能性がある国があるが、フランスの行方の重大さは誰しもが認めるところである。

個人的には、結果的には僅差でフランス国民投票でも批准されるのではないかと予想している。3月の世論調査でも実は半数以上が棄権を表明していて、果たして3月の時点で棄権を表明していた人が本投票でどの程度ほんとうに棄権するのかは何ともいえないが、結果的には賛成に回る国民が多いのではなからうか。あまりに甘すぎる予測だろうか。(中尾 浩)

P.S. 5月29日の国民投票でフランスはEU憲法批准を否決した。

韓国

磁気浮上式リニアモーターカー： 実用路線化へ向けて着々

愛知万博を機に、藤ヶ丘と万博八草駅を結ぶ路線9kmの「リニモ」が本年3月に開通した。これは、我が国で初の磁気浮上式リニアモーターカー実用路線であるが、世界では、2004年1月に中国の上海で開通した、空港と都心を結ぶ32kmの路線について2番目である。ともに常電導磁気吸引式であるが、「リニモ」はHSSTと呼ばれる方式で最高時速が100kmほどなのにはたいし、上海のものはドイツで開発されたトランスラピッド方式を輸入したもので最高時速430kmで走ることができる。

ところで、いま、韓国では世界で3番目の磁気浮上式リニアモーターカー（韓国語では「磁気浮上列車자기 부상 열차」）の実用化に向けて着々と準備が進められており、5月10日に、大田の韓国機械研究院한국기계연구원의試験路線1.3kmで、関係者やマスコミの記者らを招待して試乗会が開催された。これは、現代自動車グループの鉄道車両系列社ロテム로템と機械研究院が共同開発した

もので、1993年の大田エキスポの時に会場内に設置されて12万人余りが利用したが、その後IMF危機で開発が中断されたのち、国策事業として選定されて開発が再開されたものだというのである。方式は「リニモ」と同じで最高時速は110km、2両1編成、定員は1両当たり135名。

この実用化路線の第1号は、大田の大田エキスポ公園と国立中央科学館を結ぶ1kmで、本年10月1日に着工、2007年4月に開通することが予定されている。そこでの実地試験を経て2009年ないし2010年には各地の市街地での運行がはじまるということである。なお、列車の名前は公募して決めることになっている。

付け加えれば、ロテムは昨年すでに、マレーシアやインドネシアなどにこの列車を輸出しようとしたが、実用路線での運行実績がないため契約を結ぶにいたらなかったという。次世代交通手段の技術でドイツや日本に従属しないためにも、韓国国産の技術による磁気浮上式リニアモーターカーの実用路線化が急がれている。(田川光照)

第10回 外国語コンテスト

英語部門

今回は参加者が前回のおよそ半数だったが、全体的には水準の高いコンテストとなった。内容は国際関係論から英語学習や海外滞在の経験、ヴォランティアや英語演劇についてなど、多様なものだった。審査員は例年通り本学名誉教授の池稔氏と法学部教授のジョン・ハミルトン氏で、上位入賞者は以下のとおりである。

第1位 02M3378 白鷺 'Earth-being'

第2位 04C 8097 村瀬めぐみ

'Things I Learned'

第3位 02M3087 古澤真由子 'My Memory'

第3位 04C 8074 芳賀保美

'What I Learn in EC Class'

第1位の白鷺さんは昨年に引き続き二年連続の優勝である。第2位の村瀬めぐみさんと第3位の芳賀保美さんは現代中国学部の1年生で、今回の初参加で上位入賞を果たした。同じく第3位の古澤真由子さんは昨年に続いて二度目の参加である。今回は参加者の甲乙がつけがたく、結果的に第3位が二名になってしまった。今回は経営学部の3年生と現代中国学部の1年生の活躍が顕著だったと言える。

今回はロングマン ELT の協賛をいただき、上位入賞者には副賞として CD-ROM つき英語辞典 *Longman Dictionary of Contemporary English* が贈られた。なお、第1位の白鷺さんによるスピーチ 'Earth-being' の原稿を後に掲載する。

(安藤 聡)

ドイツ語部門

2003年度の名古屋語学教育研究室主催第10回外国語コンテスト・ドイツ語部門の本選が、2004年11月26日（金曜日）の午後4時40分より名古屋校舎中央教室棟203教室でおこなわれました。その結果を簡単にですが、報告したいと思います。

今回の課題は、ドイツ語の統一テキスト“Lernziel Deutsch. Grundstufe 1.”のReihe 12のText B “Die Fremdsprache. Ein Märchen”を選びました。「メルヘン」という副題からわかるように童話で、外国語として犬の言葉(!)を学んだ王子の物語です。何の役にも立たないと思われた犬の言葉が王子の成功の鍵になるという内容です。童話とはいえ、過去形が多用され、話し言葉よりも書き言葉を主体にした若干硬い文章で書かれていて決して平易なものではありません。参加者にとって準備と勇気の要るものとなりましたが、ほぼ例年通り9名の参加者がありました。審査にあたったのは、ドイツ語担当教員である法学部所属の竹中克英先生と経営学部所属の私(島田了)の二人で、表現力と発音・アクセントの合計点で審査を行いました。

すでに述べたように、内容としては決して簡単ではないテキストにも拘らず、参加者は各自で熱心に練習に取り組んだ様子で、予想を遥かに超える結果となりました。基本となる発音・アクセントに関しては非常に完成度が高く、上位入賞者の間ではさらに高いレベルで表現力を競う争いになりました。非常に接戦となりましたが、今回の課題が物語であることを重視して、表現力が決め手となりました。結果は、第一位(優勝)岩田祐治君(03J1265)、第二位箕浦直美さん(03M3031)、第三位伊藤純平君(03J1166)となりました。

毎年参加者の数が他の言語に比べると少ないとの指摘もありますが、もともとのドイツ語の履修者自体が他の外国語に比べると決して多くはないので仕方のない点もあります。この点を何らかの形で工夫して、今回はより多くの参加者が集まるようにしたいと思います。しかし法学部・経営学部といった社会科学系の学部を中心とした愛知大学名古屋校舎で、これだけ熱心にそして上手にドイツ語を話せる学生がいるということは、ドイツ語の担当教員としてとてもうれしく思います。

意欲的な学生の皆さん、語学教育研究室にかかわっている多くの教職員のみなさんのおかげで今回もこのような意義のあるコンテストを続けることができましたことに、心よりお礼申し上げます。

(島田 了)

フランス語部門

フランス語部門は、例年のごとく国際コミュニケーション学部のラッセン教授を審査員として招き、11月29日に本選を行なった。出場者は12名で、前回に比べ半減したが、このコンテストが始まり10回目にして初めて車道校舎法学部2部の学生が1名参加した。

審査はこれまで通り予選と決戦の2回に分けて行なった。テキストとして用いたのはジャック・ブレヴェールの反戦詩“Barbara”(「バルバラ」)で、予選では、あらかじめ配付されていた前半部分を全員に朗読してもらい、決戦では、その場で配付された後半部分を朗読してもらった。決戦進出者6名の中から、最終的に次の3名が入賞した。白鷺さんは、2年連続の入賞(前は2位)である。

- 1位 02M3378 白鷺
- 2位 03J1292 成田 愛
- 3位 03J1320 川瀬 匡司

テキストは、ブルターニュ地方の軍港都市ブレストを舞台に、バルバラという女性を主人公にし

て戦争の愚かさ(Quelle connerie, la guerre! : 戦争とはなんと愚かなことか!)を描いたものであるが、シュールレアリズムの流れを引く詩人の作品だけに、内容的にやや難しかったかもしれない。そのために、あらかじめテキストを与えられていた予選においても、情感をこめて読むことまでできた出場者はほとんどいなかった。とはいえ、少なくとも発音面では上記入賞者のほか、決戦に残った人たちもまずまずであった。とくに決戦ではテキストを初めて見ることもあって、綴り字の読み間違いがあったが、フランス語での綴り字と読みの関係は非常に規則的であるから、普段からその関係に注意しながら勉強することが大切である。

それはともかく、コンテストに積極的に参加してくれた出場者の皆さん全員に敬意を表したい。その積極さが必ず力になるはずである。

(田川光照)

中国語部門(法・経営)

中国語コンテスト「法・経営部門」は、2004年11月18日(木)13時30分より207教室で行われました。第10回という節目の今大会には、史上最高の55名が参加しました。課題文の朗読は、応用部門が「買靴」という中国の笑い話、基礎部門が「私の一日」を紹介する内容でした。午後1時半開始予定でしたが、すでに1時頃には大多数の学生が会場に現れ、正しい発音の最終確認をされていて、開始前から会場は熱い雰囲気になっていました。「ともかく優勝したい」、「正確な発音をしなくちゃ」、「恥をかきたくない」など、参加者はそれぞれの思いを胸に秘めてコンテストに臨んでいました。開始10分前にある参加者の提案で、参加者全員が担当者の合図にあわせて、いっせいに朗読の練習をしました。学生たちのコンテストにける真剣さと熱意が私たち教員にも伝わってきました。審査は矢田博士先生と鄭が担当し、結果は次の通りでした。

- 第1位 01S J1002 原田 大輔

- 第2位 02M3463 鈴木 和代
 第3位 03J1198 小崎 一弘
 (鄭 高咏)

中国語部門 (現中)

第10回外国語コンテスト中国語現中部門は、2004年11月18日木曜日15時30分から、自由部門と課題部門の順で行われました。出場者は自由部門が6名、課題部門が28名でした。審査には、顧明耀先生と安部悟先生に加わっていただきました。

自由部門では、各出場者が自らの体験に基づいて中国語で作文したものを、情緒豊かに発表しました。厳正な審査の結果、次の1名が入賞しました。

- 1位 02C8228 神田 亮

神田君は、「我終生の伴侶 (私の一生の伴侶)」というタイトルで、可愛い「蝦(エビ)」たちとの生活について語りました。

課題部門は、中国で有名な「エペンティのとんち話」から選んだ「至理名言 (まことにもっともな名言)」というお話の暗誦でした。エペンティが頓知で地主をやっつける様子を、各出場者が工夫を凝らしてユーモラスに発表しました。厳正な審査の結果、次の3名が入賞しました。

- 1位 04C8065 紅林 文子
 2位 04C8016 河野 純華
 3位 04C8164 川原 三紗
 (中川裕三)

韓国・朝鮮語部門

韓国・朝鮮語「本選」は04.11.18(木)午後2時から開催。参加者は38名と盛況。審査には陶山名誉教授と常石が当たった。1, 2年生は従来のように「課題朗読文」、つまり学年に応じ一定の韓国語文章を朗読。しかし3年生以上は、04年度から開講された「上級クラス」に対応させ、「自

由作文発表」および「自由課題朗読」としたが、これは初めての試みであった。

審査の結果、入賞者は次の3名。

- 第一位 02C8050 古澤 希予衣
 第二位 02J1372 小島 健志
 第三位 03M3061 細江 夕輝

一位、二位が3年生(当時)であったのに対し、2年生細江君の健闘が光った。(常石希望)

日本語部門

外国語コンテスト「日本語部門」は、日本語を母語としない者を対象に開かれています。今年は「留学生の見た日本」というテーマで、自らの体験を盛り込み、身近な出来事から意見や考えを述べるのが課題でした。

伝統的に法・経・現中三学部の1年生は全員参加となっています。60名近くにもなりますから予選を行います。予選で20名ずつに分かれた各クラスから3名の代表者が選ばれ、9名が本選に進みました。本選へは他の学年の誰でも出場できますが、今回は申し込みがなく、2004年11月18日、1年生9名で競うこととなりました。

アルバイトを題材としたものが多かったのですが、その内容は仕事の厳しさ、職場の暖かい人間関係、仕事に取り組む姿勢など多様でした。イントネーション、間の取り方、アイコンタクトなど、聴衆との言語的・非言語的コミュニケーションを念頭にスピーチに取り組みました。どれも内容豊かで、聞き手を納得させるものでした。

審査は、教員2名(架谷・梅田)、学生審査員2名、聴衆約50名の投票によって行い、熱い空気の中、3名の入賞者が決定しました。

- 1位 04C8184 劉是呈「やればできる」
 2位 04C8187 潘子剛「日本、ありがとう」
 3位 04C8175 金海花
 「日本人は優しい?冷たい?」

また、惜しくも無冠の勝者となったみなさんは以下の方々です。

04 C 8169 崔英 04M3377 申永日
 04M3380 楊森 04 C 8182 劉贛玥
 04M3381 楊艷華 04 J 1378 劉彤旭 (敬称略)

最後に一言。外国語コンテストは1年生だけの行事ではありません。次回の挑戦を待っています！また、日本人学生のみなさんはコンテストに参加できませんが、ぜひ聴衆として留学生の声を聞きに来てください。 (梅田康子)



外国語コンテスト入賞作



英語部門

第1位 Earth-being

(白鷺)

Hello friends! Maybe you are wondering what “earth-being” means. I must confess that I made this English word. If you want to know more about “earth-being”, please listen to me carefully.

The first time when I heard the word was in my high school life. One day in Japanese class, the teacher said the word “earth-being”. I can’t remember the situation when she said that because I was thinking of some more interesting things than the class. But I can remember very well what she said then. She said, “If someone asks you where you are from? How will you answer?”..... (Ask the audience the same question)... My Japanese teacher said that she is from the earth, so she is an earth-being. Don’t you think that her answer is very unique?

At that time I just thought “earth-being” is an interesting idea. It was not until I took Mr. Ono’s class this year that I realized the importance of the word. We discussed “peace” in the class. We perceived that the meaning of peace is different for different people. Some people think that if everybody is happy, that is peace! But other people who are concerned more for themselves than for others will think that peace is having big power and a lot of money. If those people do have big power or a lot of money, that means a number of people will be poor or in a dangerous condition. They will think that is peace and happiness, but it will not be peace for a large number of people. Maybe war will occur by such thinking. What is the most

important is that everyone thinks of not only his or her happiness but also others' happiness.

Please remember the word "earth-being". This easy word has a big power to make human beings stop conflict and war. Today, we do not just live in our own country, like me. We are interacting with foreign people every day, every time, through the Internet, newspaper, television, and so on. The Internet changed information from being a one way street to a two way street. Individuals can send their information to the world in a minute. And if you are majoring in management at this university, you know companies can't run without dealing with foreign companies. All of these realities show that more than the fact that you are Japanese or I am Chinese; we are living on this planet, the "earth", aren't we?

If we are all "earth-beings", all of us will be a brotherhood, and then we will love each other; and love our common home more and more. Maybe "earth-being" is not a good word to unite humankind, but today if you are interested in my speech, please find a much better word, and tell me, tell all the people living on this same planet. I am looking forward to your answer. Thank you.

日本語部門

第1位 やればできる

劉 是呈

皆さん、今日は！

中国から来た留学生、劉是呈と申します。今日、自分は日本で経験したことを話したい、皆さんに聞いてもらいたいと思います。

最初日本へ来たばかりの時、アルバイトがなかなか見つけれなくて、学校以外の時間はほとんどテレビを見ることで済ませました。日本語の聞き取り能力を高められるし、日本の文化もよく理解できます。当時、高校を卒業したばかりで社会経験が全くなく、ただ一人で日本に来た私にとって、何にも分からない異国の社会を理解できるようになる方法と言えば、テレビを見るのが一番いいと言えるのではないのでしょうか。今でも、暇さえあればよくテレビを見ます。その中でも、最も印象に残っているのは「明日があるさ」というドラマです。そのドラマで、社員たちはいろいろ研究を重ねて、新しい商品を作り出しました。いろいろ努力をした結果、その新商品によって倒産しそうだった会社を救ったという話でした。私は、初めてこういうようなドラマを見たからかもしれませんが、すごく感動しました。しかし、なぜ感動したのか、あの時、考えようとしなかったのです。

来日から半年、私は多くの留学生と同じく、アルバイト生活を始めました。今までいろんなバイトをしてきましたが、最も印象に残っているのは、初めてのバイトです。それは飲食店のバイトでした。その店の長は二十五、六歳の人で、私よりただ五、六歳うえの人です。そんな若さで全国チェーン店の店長までやってるなんて、きっとなにか才能があるんじゃないかなと思いましたけど、付き合ってみたら、別に特別なところがなかったのです。しかしある日のできごとで、私の考えが変わりました。

あれはある土曜日のことでした。店の一番忙しい曜日でしたが、二人の人が病気で休んで、みんな

な手がまわらない状態で、必死に働いたのです。午前中だけでも死ぬほど疲れしました。それから休憩の時間がようやく来て、「助かったなー」とみんなは感じました。早速、二人ずつ交替で店の二階に休憩に行き、ほとんどの人は上にあがるとすぐに寝てしまいました。それほどきつかったんです。私も、午前がこんなに忙しかったら午後はもう大変なことになるなー、と休憩前から気が重かったんです。それで全員休みが終わって、まるで戦争を迎える軍人のように、皆準備している時、店長だけ休まなかったことに気付きました。聞いてみたら、「俺は店長だから当たり前だぞ」と言われました。その瞬間、私は「明日があるさ」というドラマを思い出しました。なぜあの時感動したのか。それになぜ目の前の若い人は店長までやっているのか、全て分かりました。日本人が一番大切にするのは、才能だけではなくて、責任感とやればできるという頑張る気持ちなんだ！

結局、その日はとっても忙しかったんです。帰り道に、店長のとても歩けなさそうな姿を見た時、この若い人を心から尊敬する気持ちが生まれました。

皆さん、留学生のアルバイトをしている姿をよく見かけますね。もしかしたら、居酒屋のほうが大学よりよく会うかもしれません。「留学生ってアルバイトばかりしているんじゃないの？勉強の時間がないんじゃないの？」と思ってる人も多いかもしれません。しかし、アルバイトは、留学生にとって、ただのお金をもらう道というわけでもないんです。私は将来日中ビジネスをやりたい。そのためには多くの日本人と接して、日本の文化や考え方をよく理解することが大切だと思っています。私と同じ考えを持っている留学生は決して少なくありません。

「やればできる」こんな素敵な、日本人が自慢できる伝統的な精神は、私の場合、アルバイトをするなかで学んで来ました。そして、今、この「やればできる」精神は、職場だけではなく、学業や生活の様々な面でも生きています。

留学生の皆さん、この「がんばる気合」を身に

付けてください！それに日本人の皆さんも素敵な伝統精神を守り続けてください！

「やればできる」どんな困難なことにも克つことはきっとできる。今、学生であっても、将来の目標に向かって全力で行く社会人であっても、や・れ・ば・で・き・る、この六文字の魔法の言葉を忘れないでください。身に付けているものを発揮すれば、さらにやる気を出せば、我々の未来はきっと明るいのだ。

それは.....間違いない！

第2位 日本、ありがとう

潘 子剛

2002年、私は朝日奨学生として、日本に来ました。私は一人っ子なので、家で甘やかされて育ちました。子供のころから苦しみに耐えるような経験もなかったです。もし、日本に来なければ、たぶん中国にいて、新聞を配達することなど一生なかったかもしれません。

新聞の配達は、一番大変な仕事だと思っています。朝2時から6時まで、午後は2時から5時まで、毎日仕事しました。雨や台風の時でも仕事しなければなりません。時々エレベータのないマンションもあって、そんな時、下から上まで階段をのぼるしかありませんでした。

最初、仕事を始めたばかりの時、バイクに慣れていないので、よく転びました。ある日、たくさん新聞をのせて坂をのぼっている時、新聞が重くて、バイクが倒れてしまいました。私もけがしました。足がすごく痛かったです。涙が目ににじんでいました。それでも家族に心配かけないように、両親にも言わなかったです。

それだけでなく、店に「日暮」という主任がいました。私はいつも言い訳していましたので、よく叱られていました。最初、彼を恨んでいました。私はいつも叱られていることを両親に話しました。すると、両親は主任が正しいと思ったようです。「あなたは主任にありがたいと思うべきなのに、

何で恨んでいる？主任が仕事のために叱ることは当たり前だ。そして、それはあなたの自分のためにも役に立つんだよ」と言いました。その後、私も考え方が変わりました。

日本社会は競争が激しいです。留学生として日本で生きるために、私達は日本人よりもっと頑張るしかありません。毎日プレッシャーを感じ、ときに日本人からさげすみを受けます。ですから、日本が嫌いになる人もいます。日本人を恨む人もいます。しかし、私は日本と日本人にありがたいと思っています。

1300年前、中国人は日本人の先生でした。日本人に文字や文化などを教えました。1300年後の今日、日本人が中国人の先生です。中国人になぜ頑張るか、どうやって頑張るかということをお教えています。私達は強くなることを勉強しました。私達は逆境で生きるということをお勉強しました。それは、中国語で「煉獄亦天堂」、つまり、苦勞を種に花を咲かせるということです。

人間は、誰でも鍛えられながら成長しています。今、私は別のバイトをしています。前のようにいつも店長に叱られています。でも、私は店長を恨んでいません。なぜなら、店長が私を助けてくれているからです。

日本に来てからもう2年になりました。この2年間、私は日本人にありがたい、日本にありがたいと思っています。本当に言いたい、「日本、ありがとう。」

ご静聴ありがとうございました。

公開講座「言語」2005 プログラム

主催：愛知大学言語学談話会

共催：愛知大学語学教育研究室・愛知大学同友会

場所：愛知大学車道校舎 461-8641 名古屋市東区筒井 2-10-31 TEL: 052-937-8111 (地下鉄桜通線「車道」下車, 1番出口より徒歩1分)

時間：14:30～16:30

聴講無料

公開講座「言語」30周年記念講演会

2005年7月9日(土) 車道校舎本館1005教室(予定)

「マイケル・トマセロと言語研究 —21世紀の言語学は何を目指すのか—」

伊藤 忠夫 (中京大学教養部教授)

<後期> 車道校舎本館1003教室 (予定)

2005年

(5) 9月17日(土)

「フランス語初級学習者の弱点について」

田川 光照 (愛知大学経営学部教授)

(6) 10月1日(土)

「身体性から見る日本語文法 —一時制形式の意味機能—」

山本 雅子 (愛知大学国際コミュニケーション学部助教授)

(7) 11月5日(土)

「ウェブスター辞書の伝統」

早川 勇 (愛知大学経済学部教授)

(8) 12月3日(土)

「エッセーの言語 —モンテニユを読む—」

高橋 秀雄 (愛知大学文学部教授)

2006年

(9) 1月7日(土)

「日・中・韓の言語教学雑感」

陶山 信男 (愛知大学名誉教授)

編集後記

友人がヘブライ語を勉強中である。と言っても旧約聖書を研究するためではなく、ただ単にヘブライ語を学習することそれ自身が目的なのだそう。彼女の本職は理科教師。大学時代には理学部で応用化学を専攻し、ドイツ語とロシア語を選択した。その後イタリア語を独学で身につけ、現在はイタリア人とインターネット上で交流したりもしている。英語とラテン語もそれなりに出来る。彼女の場合、資格取得や実益とは一切無縁のところ、これだけの外国語を学んで身につけている点が目玉に値する。

今号の表紙の写真と解説文は一年間の牛津留学から帰国した多田先生の提供による。このBiburyは詩人・工芸デザイナーとして名高いウィリアム・モリスが「英国で最も美しい村」と呼んだ。(S.A.)